

科目区分	専門分野	授業科目	小児看護学概論
講師名		実務経験の有無	有
単位数(時間)	2単位(30 時間)	開講年次	1年次
<p>目的: 子どもの特徴や子どもを取り巻く社会を理解し、成長発達の促進や健康を保持増進するために必要な基礎的知識を習得する。</p> <p>目標: 1 子どもの成長・発達を形態的側面、機能的側面、精神運動的側面、社会的側面から理解できる。  2 保健、医療、福祉、教育の連携と小児看護の機能と役割を理解できる。  3 子どもを取り巻く社会とその動向を理解し、健全に成長・発達するための社会的環境と看護の役割を理解できる。</p>			
授業計画			
単元	時間	内容	
1 小児看護の理念と特徴	5	1 小児看護の理念と特徴 1) 小児看護の対象 2) 小児看護の目標と役割 2 小児看護の変遷 3 子どもと家族の諸統計 1) わが国の人口構造 2) 出生率 3) 子どもの死亡と死因 (1) 周産期死亡 (2) 乳児死亡 (3) 疾病罹患率 4 小児看護の課題 1) 疾病構造の変化と小児看護 2) 社会の変化と小児看護 5 小児看護における倫理 1) 子どもの権利 2) 倫理的配慮と看護	
2 子どもの成長と発達	14	1 子どもの成長・発達 1) 小児看護における発達論 2) 成長・発達の進み方 3) 成長・発達に影響する因子 4) 成長・発達の評価 2 小児各期の成長・発達の特徴 1) 新生児期の形態的・生理的機能的特徴、社会性の発達 2) 乳児期の形態的・生理的機能的特徴、社会性の発達 3) 幼児前期・後期の形態的・生理的機能的特徴、社会性の発達 4) 学童期の形態的・生理的機能的特徴、社会性の発達 5) 思春期・青年期の身体的・心理的・社会的特徴 3 子どもの遊び 1) 遊びの意義 2) 遊びの分類と発達 4 子どもの栄養 1) 子どもにとっての栄養の意義 2) 食育 (1) 食育基本法 (2) 生活習慣病予防 3) 食事摂取基準 4) 小児各期の栄養の特徴 (1) 乳児期 (2) 幼児期	

		<ul style="list-style-type: none"> <li>(3) 学童期・思春期</li> <li>5 子どもの事故と安全対策 <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 子どもの事故の現状</li> <li>2) 事故防止対策 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 子ども自身での対策</li> <li>(2) 家庭環境での対策</li> <li>(3) 社会環境での対策</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>
3 子どもと家族を取り巻く社会	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 子どもと家族 <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 家族の機能と役割</li> <li>2) 現代家族の特徴</li> <li>3) 家族アセスメント</li> <li>4) さまざまな家族の状況</li> </ul> </li> <li>2 児童福祉施策 <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 児童福祉の歴史</li> <li>2) 児童福祉施策 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) エンゼルプラン</li> <li>(2) 児童虐待防止</li> <li>(3) 貧困</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>3 母子保健施策 <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 母子保健の歴史</li> <li>2) 母子保健施策 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 訪問指導</li> <li>(2) 健康診査</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>4 医療費の支援 <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 未熟児養育医療</li> <li>2) 小児慢性特定疾病対策</li> </ul> </li> <li>5 予防接種 <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 予防接種法</li> <li>2) 対象疾患と接種方法</li> </ul> </li> <li>6 学校保健 <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 学校保健の意義と行政</li> <li>2) 学校保健の実際</li> <li>3) 感染予防</li> </ul> </li> <li>7 子どもに関わる現代社会の諸問題 <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 不登校、いじめ</li> <li>2) 生活習慣病</li> <li>3) 性、性教育</li> </ul> </li> <li>8 特別支援教育</li> <li>9 臓器移植</li> </ul>
	1	試験
評価方法		筆記試験
テキスト 参考資料		医学書院 小児看護学〔1〕 小児看護学概論・小児臨床看護総論 医学書院 小児看護学〔2〕 小児臨床看護学各論 医学書院 看護のための人間発達学
履修上の 留意事項		必要に応じて適宜紹介する。
備考		

科目区分	専門分野	授業科目	小児看護学援助論 I
講師名		実務経験の有無	有
単位数(時間)	1単位(15時間)	開講年次	2年次
<p>目的: 子どもの健康の保持・増進、成長・発達を促すための基礎的知識と技術を習得する。</p> <p>目標: 1 子どもの成長・発達に応じた日常生活援助の方法を理解し、基本技術ができる。</p> <p>2 子どものアセスメントに必要な技術を理解し、基本技術ができる。</p> <p>3 子どもの診療に伴う看護技術および発達段階に応じた援助方法が理解できる。</p>			
授業計画			
単元	時間	内容	
1 子どもの日常生活援助	4	1 子どもの日常生活援助の基本 1) 発達段階に即したセルフケアの支援 2 小児各期の日常生活援助技術 1) 乳児期 (1) 調乳方法と授乳の仕方 ※1 (2) おむつの種類・着脱方法 ※1 2) 幼児期 (1) トイレトレーニング (2) 衣類の着脱の仕方 3) 学童期・思春期・青年期 (1) 学習支援 (2) 健康教育	
2 子どものヘルスアセスメント	4	1 アセスメントに必要な技術 1) コミュニケーション 2) 身体測定 ※1 3) バイタルサイン測定 4) ヘルスアセスメント ※1 (1) 観察の基本技法(問診・視診・聴診・触診) (2) 呼吸のアセスメント (3) 循環器系のアセスメント (4) 腹部のアセスメント (5) 筋・骨格系のアセスメント	
3 子どもの診療に伴う看護技術	6	1 検査・処置を受ける子ども 1) 子どもにとっての検査・処置 2) 発達段階に応じたプリパレーション 2 検査・処置に伴う看護の実際 1) 与薬 (1) 薬剤の形状・年齢に応じた与え方 (2) 注射 (3) 持続輸液管理法(固定・滴数調整) 2) 検体採取と援助 (1) 採血 (2) 採尿、便採取 (3) 骨髄穿刺 ※1 (4) 腰椎穿刺 ※1 3) 抑制 4) 酸素療法 ※1 5) 呼吸理学療法 ※1	
	1	試験	

評価方法	筆記試験
テキスト	医学書院 小児看護学〔1〕 小児看護学概論・小児臨床看護総論 医学書院 小児看護学〔2〕 小児臨床看護学各論 インターメディカ 写真でわかる小児看護技術アドバンス
参考資料	必要に応じて適宜紹介する。
履修上の 留意事項	予習・復習をして授業に臨むこと。 積極的に参加し、技術習得に努めること。
備考	※1は演習を行う。

科目区分	専門分野	授業科目	小児看護学援助論Ⅱ
講師名		実務経験の有無	有
単位数(時間)	1単位(30時間)	開講年次	2年次
<p>目的: 健康障害や症状・経過に応じた子どもの看護を実践するための基礎的能力を養う。</p> <p>目標: 1 子どもの健康障害の特徴と環境や状況に応じた子どもと家族への看護を理解できる。  2 主な症状や健康障害をもつ子どもの看護を理解できる。  3 子どもの看護の特徴を踏まえた、看護過程の展開を理解できる。</p>			
授業計画			
単元	時間	内容	
1 子どもを取り巻く環境や状況における看護	10	1 子どもの健康障害と看護の特徴 2 健康障害により子どもと家族に起こる精神・社会的影響 3 子どもの入院とその影響 1) 入院環境 2) 入院が子どもと家族に及ぼす影響 3) 入院している子どもと家族の看護 (1) 意思決定支援 (2) 事故防止 (3) 遊び・学習の援助 4 医療を受ける子どもの実際 1) 医療を受ける子どもの環境 2) 専門職種との連携 5 周手術期の子どもと家族の看護 6 終末期の子どもと家族の看護 7 外来における子どもと家族の看護 8 長期療養が必要な子どもと家族の看護 1) 保育との連携 2) 教育との連携 9 継続看護の実際 1) 家族との連携 2) 学校との連携 3) 地域(外来も含む)との連携 10 災害時の子どもと家族の看護 1) 被災地の環境と看護の役割 2) 災害時の子どもと家族の援助	
2 健康障害をもつ子どもの看護	11	1 主な症状に応じた子どもの看護 1) 発熱、痛み、発疹、嘔吐・下痢、脱水、浮腫、呼吸困難・チアノーゼ、けいれん・意識障害 2 主な健康障害における子どもの看護 1) 活動制限が必要な子どもと家族 (1) 排泄機能の障害;ネフローゼ症候群、急性腎炎 (2) 運動機能の障害;骨折、ギプス固定 2) 隔離が必要な子どもと家族 (1) 感染症;麻疹、水痘、流行性耳下腺炎、髄膜炎 (2) 悪性新生物;白血病 3) 先天的な問題をもつ子どもと家族 (1) 染色体異常;ダウン症 (2) 循環機能の障害;先天性心疾患 4) 手術を受ける子どもと家族 (1) 消化機能の障害;胆道閉鎖症、ヒルシュスプルング病 5) 急性期にある子どもと家族 (2) 川崎病、気管支炎・肺炎	

		6) 慢性期にある子どもと看護 (1) 代謝機能の障害;糖尿病 (2) 免疫機能の障害;気管支喘息、食物アレルギー 7) 障害のある子どもと家族 (1) 脳性麻痺、てんかん
3 健康障害を持つ子どもの看護過程	8	1 子どもの看護過程の展開の特徴 1) 小児看護の目標と役割 2) 家族支援 2 事例をもとにした看護過程の展開 ※1 1) 発達段階を踏まえたアセスメント 2) 発達段階に応じた目標・計画立案、成長・発達を促す計画立案
	1	試験
評価方法		筆記試験、レポート課題
テキスト		医学書院 小児看護学1 小児看護学概論・小児臨床看護総論 医学書院 小児看護学2 小児臨床看護学各論 医学書院 看護のための人間発達学
参考資料		必要に応じて適宜紹介する。
履修上の留意事項		予習・復習をして授業に臨むこと。 グループワークは積極的な参加姿勢で臨むこと。 提出物は、提出日時を厳守すること。
備考		※1は演習を行う。 単元1 医療を受ける子どもの実際では専門病院で行われている医療や看護について講義を受け、その実際(環境を含む)を見学する。また、関連する専門職種から、役割や支援の特徴や地域との連携について講義を受ける。

# 小児看護学実習

[2単位 90時間]

## 目的

子どもとその家族の生活を理解し、成長発達を支え、健康の保持・増進ができる看護実践能力を培う。

## 目標

- 1 対象の成長発達段階をふまえ、適切な看護を実践できる。
- 2 子どもの生活の場を知り、健康状態をふまえて、その子らしい生活を送る援助ができる。
- 3 子どもの尊厳と権利を尊重した援助が理解できる。
- 4 子どもと家族を取り巻く保健医療福祉・教育との連携を知り、多職種間における看護の役割が理解できる。

# 病院

## 目的

健康障害のある子どもと家族を理解し、小児看護を実践できる基礎的能力を習得する。

## 目標

- 1 対象の身体的・精神的・社会的な特徴を理解し、健康の保持・増進を目指した援助が実践できる。
  - 1) 対象の成長発達の過程および現在の成長発達段階を統合的に理解できる。
  - 2) 対象の健康障害および検査・治療の実際を理解できる。
  - 3) 健康障害や入院・治療が対象の生活へ及ぼす影響を理解できる。
  - 4) 対象の生活を阻害している看護上の要因が分析できる。
  - 5) 対象の日々の状態を判断し、健康の保持・増進に向けた計画、成長発達を促す計画を立案できる。
  - 6) 対象の反応にあわせた援助を安全かつ安楽に実施できる。
  - 7) 対象の状態や反応を振り返り、実施した援助を考察できる。
- 2 権利擁護の必要性を理解し、子どもを尊重した看護が理解できる。
  - 1) 子どもの力を引き出すかわり子どもを尊重した看護の必要性が理解できる。
  - 2) 実践をもとに今後の自己の課題が明確にできる。
- 3 対象とのコミュニケーションが図れ、援助関係を形成できる。
  - 1) 対象のおかれている状況や反応の意味を理解できる。
  - 2) 対象の成長発達段階や健康状態、反応にあわせたコミュニケーションをとることができる。
- 4 保健医療福祉チームの一員として看護師の役割が理解できる。
  - 1) 子どもと家族を中心とした保健医療福祉および教育との連携が理解できる。
  - 2) 多職種間における看護師の役割が理解できる。

- 5 小児看護の責務を認識した行動がとれ、適切かつ積極的な態度で実習できる。
- 1) 適切に報告・連絡・相談ができる。
  - 2) 主体的な学習行動を看護実践へ反映できる。
  - 3) 責任を果たす基本的行動がとれる(守秘義務、節度ある態度、身だしなみ、健康管理)。

## 保育所

### 目的

健康な子どもの生活と望ましい養育環境、成長発達を促す生活支援について理解を深める。

### 目標

- 1 子どもの生活の場としての保育所の役割・機能を理解できる。
- 2 子どもの身体、精神、運動機能の成長・発達を理解できる。
- 3 子どもの思いに関心を寄せ、発達段階に応じたコミュニケーションをとることができる。
- 4 発達段階に応じた生活支援の方法を理解できる。
- 5 子どもの健全な育成を促すために必要な養育環境を理解できる。

実習時期 2～3年次